

井の頭自然文化園の未来を想う会
映画「手でふれてみる世界」上映会&手でふれる彫刻鑑賞ワークショップ報告書

〈実施要領〉

- ◎名 称：映画「手でふれてみる世界」上映会&手でふれる彫刻鑑賞ワークショップ
- ◎時 期：2025年1月19日（日）13時から16時
- ◎場 所：武蔵野プレイス4 F フォーラム
- ◎映 画：手でふれてみる世界（ユニバーサル版）
2022/日本/60分/日本語・イタリア語/ドキュメンタリー
- ◎鑑賞作品：3作品 《Musa》《House-ダンス》《タイトル不明作品》
- ◎参 加：一般公募（チラシ/ポスター・グーグルフォーム・フェイスブック・口コミ）
〈A〉13時～14時30分：映画鑑賞（ユニバーサル版）＋監督アフタートーク
〈B〉14時45分～15時30分：（上記〈A〉鑑賞後）＋手でふれる彫刻鑑賞ワークショップ

〈実施体制〉

- ◎主 催：井の頭自然文化園の未来を想う会
- ◎協 力：ポレポレ東中野、ワークショップボランティア
- ◎講 師：岡野 晃子
（映画『手でふれてみる世界』監督/トークセッション/ワークショップ指導/作品解説）
- ◎司会進行：1人
- ◎スタッフ：受付（2人）参加者誘導案内（9人）記録撮影（1人）トークセッション進行（1人）
（以上会員10人にて運営）

〈使用備品〉

- ◎作品ブルーレイ、映像機器、作品ポスター、作品チラシ、テーブル、椅子、携帯マイク、スピーカー、参加賞ホルダー、スタッフネームプレート、アイマスク、クリップボード、筆記具、アンケート用紙、その他

〈参加者〉

- ◎人 数：〈A〉14名 〈B〉35名
- ◎年 齢：30歳台13% 40歳台4.3% 50歳台17.4% 60歳台52.2% 70歳以上13%
- ◎地 域：武蔵野市在住47.8% その他の近隣地域
- ◎希望のイベント：〈A〉26.1% 〈B〉73.9%
- ◎イベントを知ったきっかけ：主催者・関係者からの紹介30.4% チラシ30.4% その他のきっかけ（人数以外は申込当時）

〈アンケート結果〉

- ◎回 収：〈A〉9名 〈B〉26名
（詳細は後記）

〈プログラム詳細〉 1.映画「手でふれてみる世界」鑑賞＋監督講演

2. ワークショップ「手でふれてみる美術鑑賞会」

●映画「手でふれてみる世界」について

この映画は、視覚に障害を持つイタリアの夫妻が創設した、見える人も見えない人も、美術作品に手で触れて鑑賞することができる彫刻美術館を舞台としたドキュメンタリーです。

視覚、触覚、聴覚など、さまざまな感覚を通して芸術にふれること、すべての人に開かれた、ユニバーサルな世界を考えるきっかけとなる映画です。

※本映画は、目の見えない方、耳の聴こえない方も、誰もが安心してご視聴いただけるよう、言葉による映像の解説（音声ガイド）、日本語字幕付きで上映いたします。

映画鑑賞の後は本作監督の岡野晃子さんに ご講演いただきます。
希望者と実施するワークショップでは 実際に彫刻作品に手で触れていただき、視覚以外の感覚を使って、“ふれてみる”鑑賞を体験します。

●ワークショップ「手でふれてみる美術鑑賞会」について

「触察」とは、彫刻に手で触れて美術鑑賞をする、視覚以外の感覚を使って作品と対話する方法です。

映画『手でふれてみる世界』の舞台である国立オメロ触覚美術館（イタリア）は、視覚に障害のある夫妻によって設立され、長年にわたり触覚に重きを置いた美術鑑賞を研究してきました。その手法は、ミュージアムの包括性やコミュニティへの参加を求めるICOM(国際博物館会議) 新定義の発足とともに、日本の美術館においても関心が高まっています。

本ワークショップでは、さまざまな感覚を研ぎ澄まし鑑賞することで、豊かな世界に触れていただけることを願います。

【監督・ワークショップ講師：岡野晃子 (おかの こうこ) さんプロフィール】

1973年生まれ。バンク・ストリート教育大学博物館教育研究科修士課程修了、コロンビア大学大学院美術及び美術教育研究科修士課程修了。

ヴァンジ彫刻庭園美術館にて「センス・オブ・ワンダー もうひとつの庭へ」、
「すべてのひとに石がひつよう 目と、手でふれる世界」など企画。

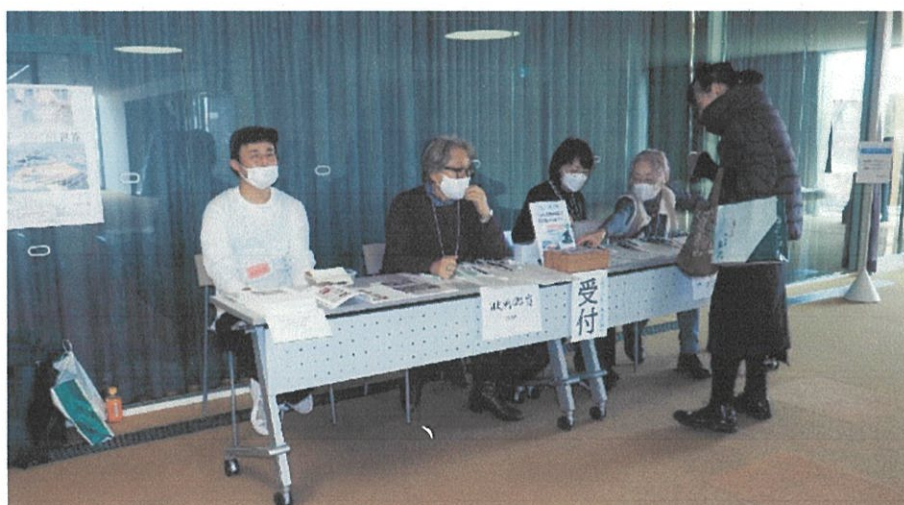
視覚にとどまらない感覚による美術館教育の可能性を研究。

その一環として、ドキュメンタリー映画「手でふれてみる世界」を制作。



◀武蔵野プレイス1Fの案内表示

〈武蔵野プレイス4Fフォーラム〉



◀4階フォーラム前で受付開始

〈映画「手でふれてみる世界」上映〉



◀13時 オープニング挨拶の後上映開始

〈映画「手でふれてみる世界」鑑賞〉



〈講師によるアフタートーク〉—映画制作に至る岡野監督の想いと活動について



岡野：映画の舞台であるオメロ触覚美術館は一昨年で30周年を迎えましたが、さわれる美術館の取り組みは日本ではまだまだです。

視覚に障がいのある人の方がよく美術作品を知っています。これらの人と一緒に鑑賞することで、より深い鑑賞体験ができます。映画の中で視覚に障がいを持つアルドさんとダニエラさんは、過去に80ヵ国以上旅をした記憶を昨日のこのように感覚で明確に記憶しています。

近年、世界で視覚以外の感覚を使った様々な取り組みが増えています。

〈講師とのトークセッション〉—誰もが楽しめるインクルーシブな美術鑑賞を目指して



岡村：山梨県立美術館では、印刷で凹凸をつけて素材感を表現するようなレリーフを展示する取り組みを行っています。

岡野：フィレンツェのウフィツィ美術館では実物作品の横にそのようなレリーフを展示していますが、日本ではまだ実現していません。

美術を鑑賞するうえでは形が大切です。彫刻作品は言葉で語れないものを形で表現しているので、触覚などの感覚が優れている視覚に障がいがある人と鑑賞することでより世界を広げることができるのです。

〈ワークショップに移動〉



◀チームごとに目隠しをした状態でワークショップ会場に移動

◀前の人の肩に手を置いて一列になって作品まで歩いていきます

◀参加者の安全に留意して誘導する人材を配置

〈ワークショップでの鑑賞作品〉



① 《Musa》制作年不明
工藤文隆 Kudo Fumitaka
ベルギー産黒大理石



② 《House -ダンス》2024年
富長敦也 Tominaga Atsuya
南アフリカ産黒御影石



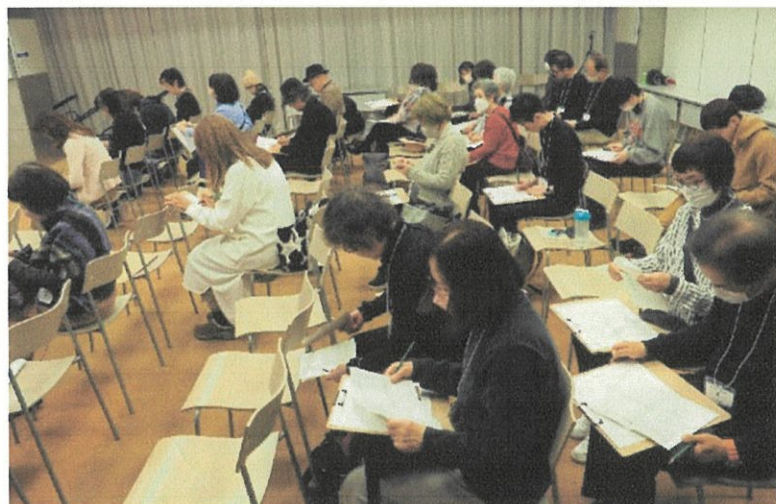
③ 《タイトル制作年不明》
イケムラレイコ
Ikemura Leiko ブロンズ

〈ワークショップー鑑賞～「触察」による作品との対話〉



◀目隠しをしたまま一人ずつ作品を
手に取りじっくり鑑賞

◀触覚だけで作品に対するイメージ
を醸成していく



◀鑑賞後に触覚で得たイメージをス
ケッチしてアウトプット

◀描き終わったら最後にタイトルをつ
けて完成

〈ワークショップー解説・フリートーク〜スケッチに込めた想いを岡野監督とみんなで自由に語り合う〉

① 《Musa》



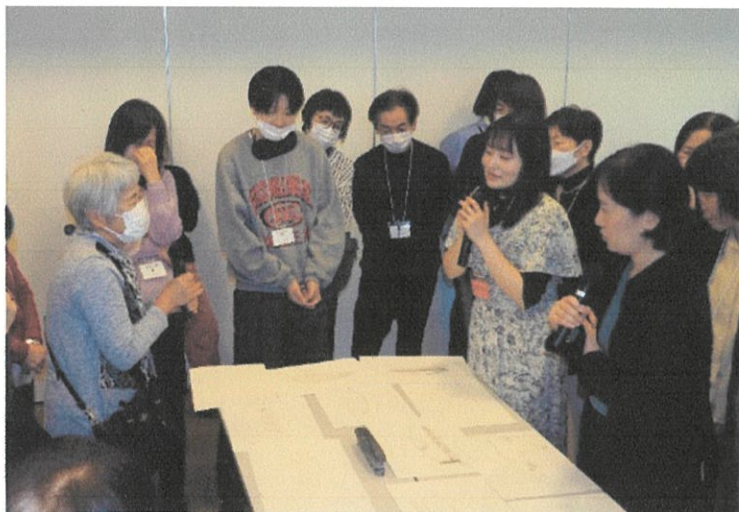
- ・サカナ的な感じだけど柔らかさがあったのでジュゴンのような感じ。
- ・自然薯のようだけど先がとんがっているのがおかしいかな。
- ・イルカかな....

岡野：美術作品に答えはないので、皆さんの経験によって変わってきます。この作家はイタリアで活動している日本の方です。タイトルは「ムーサ」といってラテン語で芸術をつかさどる女神という意味です。

② 《House -ダンス》

- ・何か抽象的なものだと思います。
- ・バナナかと思ったけれど、さわっていたらシロナガスクジラの背中が脳裏に浮かんできた。

・さわっていたら飽きちゃいました。
岡野：この作家は彫刻家で石にこだわって掘り続けている方です。「人間」というタイトルのシリーズの一つです。触覚はふれて分かるようになるには10年かかると言われています。豊かなイメージが生まれているのですね。

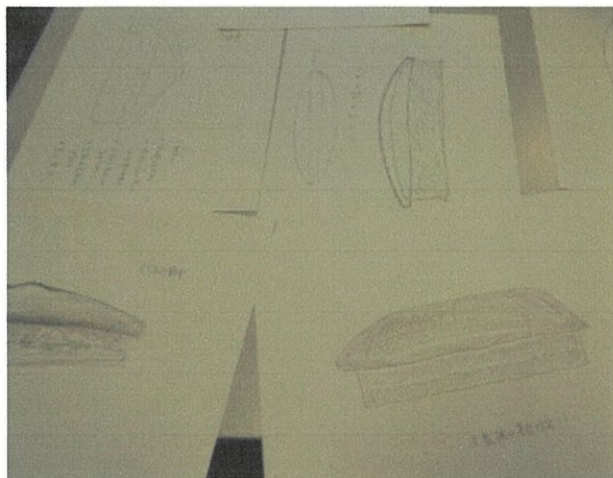


③ 《タイトル不明》



- ・小魚を載せたネコみたい。
- ・恐竜のような触覚を持っていて想像上の不思議な動物。
- ・崖から落ちている滝を登ったシャケ。

岡野：作者はイケムラレイコさんといって、70年代に日本を離れ現在はベルリンに在住しています。作品にウサギがよく出てきます。ウサギが跳ねていろいろな世界に行き来します。今回はさわることをテーマにしましたが、説明を読まないでさわって作品と対話すると意外と読み取れます。



ご参加いただきありがとうございました。

